シクラメンの栽培

東京教育大学農学部　農学博士　岡田正順

経営の特徴

シクラメンは花が美しく、草姿のつり合いもよい上に、耐寒性が強く開花期間も長いので冬期の鉢物として需要が最も多い。

また栽培期間（播種から出荷まで）が長く、特に夏期に病害が発生しやすいので栽培がむずかしく、比較的コストが高い鉢物である。即ち栽培のむずかしさ、あるいはコスト高と需要とがからんでシクラメンは比較的高価な鉢物となっている。

鉢物の生産は輸送が高くつくので元来消費地に近い都市近郊が適地であるが、単価が高ければ輸送費の比率が低下するので、シクラメンは一部の観葉植物（例えばアナナス類）や盆栽などと共に鉢物でも輸送地帯での生産も可能なものである。

シクラメンの輸送圏芸地帯は現在各地に見られるが、特異の例は香川県坂出市の例で、ここからは東阪神はもとより一部は東京にまで出荷されている。

坂出市の立地条件は社会的な条件は別として自然立地としてはシクラメンに適する花崗岩の風化土であること、年降雨量が極めて少ないこと以外には見当たらない。

シクラメンは前述のように極めて病害によわく、これが栽培を不安定にする最大の要因であるが、その病害のうち最も多く発生するのはフザリウム菌による腐敗病である。フザリウム菌は既に多くの例で知られているように高温程発生が多く、また高温程病徴が著しい。またシクラメンの花芽分化は高温によって抑制され従って高温地程開花がおくれる。

即ちシクラメンの栽培は夏期冷涼な高冷地や東北地方程病害が少なく、且つ開花が早いということになる。

長野県あるいは山梨県の一部で育苗を目的としたシクラメン栽培があるが、未だ鉢物生産を多量に行なっている例は聞かない。勿論東北、高冷地は冬期の低温がきびしくそれだけ保温または暖房の経費は高くなると思うが、シクラメンに関する限りはマイナスよりはるかにプラスが多いのではないか？

高冷地育苗

現在リレー栽培といって高冷地で育苗し、秋九月中下旬から一〇月上旬に苗を平地におろし一二月中の出荷をねらう栽培が東京を中心に普及している。これは前述のように育苗期間中の高温期を冷涼な高冷地で過させ、病害の発生防止と花芽の分化、発達を促進させて一二月出荷をねらう一石二鳥の栽培である。しかし高冷地といえども土壌消毒その他万全を期さないとフザリウムに感染することは勿論で、現在では既にフザリウム汚染地区が多発している。

しかし高冷地苗は一〇月上旬出荷で五〇～七〇円位で取り引きされ、都市近郊の鉢物生産者は約二ヵ月の栽培で五〇〇～八〇〇円で一二月中、下旬に出荷出来るので現在では両者共引き合っており今後更に伸びるものと思う。但し今後小売価格が漸減する傾向もあり、更に病害汚染の問題も見逃せないので、一つの方向はやはり、完備した施設で高冷地などでの完成品の生産であろう。

播種から育苗まで

シクラメンの播種は早いもので八月中下旬からおそいもので九月下旬、一般には九月上旬頃である。特に一二月出荷またはそれ以前の出荷をねらうには大株ほど着花数も多く、開花も早いので早播きするが、高温程発芽がおくれ且つ発芽にむらが出来る。従って八月中下旬播きは井戸や横穴などに入れることもある。

播種用土はシクラメンの大敵であるフザリウムその他の土壌病害とネマトーダなどの土壌害虫を除去するため消毒した土を用いる。土壌消毒は播種用土だけではなく、その後の鉢上げ、鉢換え用土も必ず消毒した土を用いるのでシクラメン用土の消毒法を述べておこう。

シクラメン用土の消毒法

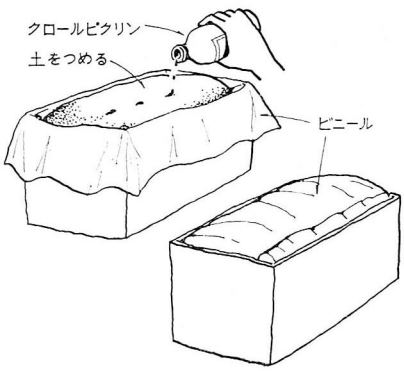
土壌消毒には蒸気消毒や焼土などの熱処理と薬剤処理とがある。シクラメンのように鉢用の土であるから圃場の消毒より手軽にしかも完全に出来る。

大規模な専業経営では土壌消毒は能率がよく完全な蒸気消毒器を利用するのがよいが、一般には焼土が多い。多少水のたまるようなへこんだ鉄板や、ドラム罐の半切などに土を入れ、十分水分を含ませて下から火をたき、上部にぬれごもをかぶせて寒暖計を挿しこんでおく。そして五〇～六〇℃以上に達したときに一度スコップで反転し、七〇℃以上になってから三〇分以上おく。乾いたらその都度水を加える。

只焼土は余り度を越して焼くと土壌中の塩類濃度が高まり、苗の生育が悪くなるし程度を少なくすると消毒が不充分になりやすい。

薬剤消毒はリンゴ箱など適当な容器にビニールをしいて土を入れ、三〇㌢角（一立方尺）当たり三～五ccのクロールピクリン

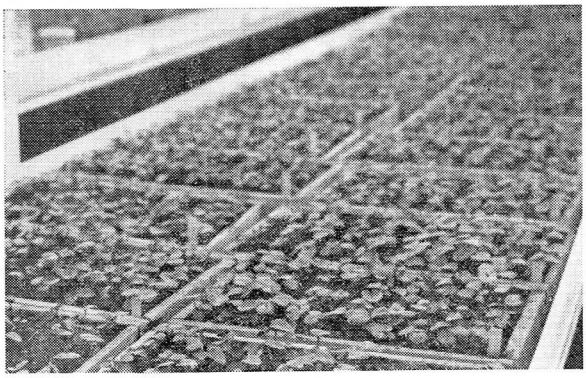
第1図　クロールピクリンによる土壌消毒



を滴下する（リンゴ箱一箱で約一〇～一五cc）。尚滴下の際指で五cc位の深さの穴を二・三ヵ所あけてこれに注入するのがよい。薬剤滴下後はすぐにビニールで覆い、使用する二、三日前まで日蔭にしまっておく。夏であれば五日から一週間もすぎれば効果がある。使用の際はビニール覆をあけ、手で十分かきまぜてクロールピクリンのガスをぬいてから用いる。

播種、鉢上げ

播種は前記の消毒した用土を五～一〇㌢のふるいでふるって小箱（深さ七、八㌢、たてよこ二〇～三〇㌢位）につめ、上部を平らにしてからこれにピンセットで良い種子だけを二㌢間かくに播き、その上からわら灰のくん炭などを五～一〇㌢位に覆土する。くん炭がなければ粗い川砂でもよい。



シクラメンの発芽状態（11月頃）

播種したら日蔭で風通しのよいむれない所におき、絶対乾かさないようにする。なお播種量は栽培途中の落ちも考えて仕立上り予定の約二倍播くのが普通である。

発芽は四〇～五〇日たって、即ち一〇月中下旬になる。発芽がそろったら少しずつ日にならし、本葉が開きはじめたら十分に日光にあてる。そして月に一、二回油粕の腐熟液やハイポネックスの薄い液を追肥する。

シクラメンは寒さには比較的強く夜温が一〇℃以上あれば十分生育するので早いもので十一月中下旬から少しずつ暖房する。五℃以下になると生育がにぶるので真冬でも五℃以上には保つようにする。

本葉が三、四枚になったら第一回の移植をする。用土は消毒ずみの土に油粕、米ぬか、骨粉などをあらかじめ発酵させておいたものを一箱に一つかみ位まぜて用いる。用土は田土（荒木田）と川砂を七対三位にまぜたものでよい。

間隔は五、六㌢位で、特に深植えにしないように注意する。移植後流水して土が落付いた時球根が地上に見える程度がよく、これより深いと腐敗する。四月上、中旬になり本葉が七、八枚になったら鉢上げする。

鉢上げ用土は田土五～六に対し腐葉土二～三、川砂二～三をよくまぜこれに前記の発酵ずみ油粕類を少量まぜて用いる。尚石灰分が不足すると生育がおくれ葉の周辺部から枯れ込むこともあるので特に酸性の強い土地では必ず石灰を混ぜるようにする。赤土や泥炭（ピート）を用いた時は特に必要である。

鉢上げ時に特に生育の悪い苗や病虫害、特に根にネコブセンチュウ（小さいこぶがついている）のついているものは捨てる。

鉢は一般に三・五号鉢（約一〇㌢）が用いられるが大苗は四号鉢（約一二㌢）に鉢上げする。

仕上げ鉢と病虫害対策

鉢上げ後は春先の適温期にあたるので生育がよくすすむ。この時期にも毎月一～二回薄い追肥を行なって生育を促進させる。

六月中、下旬頃になると葉が一〇枚以上になり、小鉢では根が一ぱいにまわるようになる。この時期が仕上鉢への鉢換え時期で一般には生育のよい大苗は六月中、下旬、生育のおくれた苗は九月上旬仕上鉢への鉢換え時とされている。七、八月の高温期の鉢換は植傷みも多く、病害も出やすくなる。

鉢の大きさは一般には五号鉢（一五㌢）で特に大苗は六号鉢（一八㌢）にすることもあるが、市場から遠い地方ではかえって不利となることが多い。

仕上鉢への鉢かえはこれから暑さに向かう頃で最も病害にもかかりやすいので、用土の消毒も古鉢を利用するとすれば鉢の消毒も完全に行なう。

用土は人によってまちまちであるが、田土を四～五割、腐葉土を二～三割、川砂を二～三割というのが標準である。また田土も十分団粒化し、水排けのよいものを用いる。消毒後この用土に石灰や前述の腐熟肥料を少量混ぜ、日蔭で手ぎわよく鉢換えする。

シクラメンの病害

シクラメンの病害にはボトリチス病やタンソ病など色々あるが最も多く出やすく、危険なのはフハイ病で、これにはフザリウム菌とバクテリア病の両方がある。しかしバクテリア病の方は比較的少なく、またこれが発生したらヒトマイシン、タケダマイシン等の抗生物質剤で割合いに早く防げる。フザリウム菌によるものは七月上、中旬頃は外葉から黄褐色に枯れはじめ七月下旬から八月中は葉柄から腐りはじまる。（バクテリア性のフハイ病は球根も早期に腐る）

フザリウム菌は球根内の継管束部（すじ）にまんえんし、葉柄につたわり、特に高温時にフハイ症状を現わす。六、七月の早期に発病したものはその前の育苗期にかかったもので涼しいうちは病徴もかんまんであるが、七、八月中には完全に腐敗するので早目に捨てる。これを残しておくとこれが二次感染源になって七、八月中に次々とうつって来る。フザリウム菌は傷痍寄生性といって傷口から感染しやすいので、まず鉢換などで根の切れる場合は完全に消毒した土を用いることが第一で、次はナメクジなどの害虫が傷口を作って伝染させる。ナメクジの駆除はフハイ病防止上大切である。

したがって六月下旬以降九月までは毎月二～三回は必ずマンネブダイセン等を散布し、ナメクジが発生したらナメキールなどで駆除し、またフハイ病が発生したらシミルトン、ソイルシン、タケダメルなどの水銀剤を散布すると共に病株は早目に捨てる。

九月以降涼しくなると急に病害は少なくなり、生育が旺盛になる。九月以降は徒長させないように十分日光にあて鉢の間隔もあけて固く作るようにする。